

3 シンポジウム

テーマ「変動する社会における生徒指導の方向性」

指定討論者	片山	紀子
シンポジスト	武野	宗睦
	大島	淳史
	榎並	俊之
	中野	悟志
ファシリテーター	大橋	忠司

片山先生から

「変動する社会における生徒指導の方向性」

現状

- ・教員不足・教員採用試験倍率低下・教職課程履修者減
- ・教育と福祉のボーダレス化・学校と社会のボーダレス化
- ・ダイバーシティかつインクルージョンの時代（片山 2021）
多様性を認めること、排除でなく包摂していくことを同時進行

近年の変化

- ・チームとしての学校
- ・学校のプラットフォーム化



多職種間連携

問い

- ・生徒指導は、多職種の専門職が連携する日常的なシステムを、これから先どうつくるのか？

◎多職種の専門職が連携するイメージ、またはキーパーソンは誰？

- 大阪府→ すべての子どもたちにとって学校が安心安全な場所となることが重要である。子どもたちのしんどさの背景を「つかみ」「収集する」ツールとして、スクリーニングを活用している。
生徒指導の中心を担う教員を置くことは学校体制を整えることに有効な手段の一つであると考えている。
- 兵庫県→ 子供たちを取り巻く環境の複雑化する中、生徒指導だけでなく、学習指導や特別支援の視点を併せ持った支援チームの一元化を検討しているところである。さらに学校で連携のキーパーソンとなる教員等を支援するチームの役割も求められていると考えている。
- 滋賀県→ 多職種連携の体制は一定整えているが、学校現場で起こるケースに対応するキーパーソンは教員が担うことが多い。そういった教員へのソーシャルワークに関する研修会は定期的に行っている。また、研修対象の幅を広げ、様々な立場の教員のスキルアップを図っている。
- 和歌山県→ 支援チームによる支援だけでなく、学校現場における対応の質を高める取組・研究をすすめている。不登校の事例では、不登校児童生徒支援員を各学校 55 校に配置するとともに、学校の支援計画等を担任や管理職と

情報共有し対応実践することで、不登校の改善がみられる例もあり、支援計画に基づく対応・支援が大切であると考えている。

新井先生から

既存のしくみを具体的に連携して動いていくために必要なことや課題について

- ・ 学校にコーディネートできる教員を位置づけることが課題。その教員には、情報が集まり、他の教員が動く中心になるなどコーディネートの力量が求められる。
- ・ 中学校や高校では生徒指導主事はその役割を担うことが考えられるが、小学校は、現状では難しいことも多い。
- ・ 教員が不足する現状では、教頭、養護教諭、生徒指導主事(担任を持っていても)でキーパーソンチームを構成して取組むことも考えられるのではないかな。
- ・ 日常的に、専門職と教員が顔の見える関係を作っておくことが重要ではないか。例えば、校内いじめ防止対策組織に専門職に参加してもらう機会を持ったり、職員室に SC・SSW の座席を置いたりすることが重要。
- ・ 最終的には、学校長の多職種連携を活かしていくマネジメント力が必要であると考えている。また、研修の成果を学校において点から線へ、線から面へと拡げていくことが必要ではないだろうか。そのためには研修のあり方を工夫することもこれからの課題。

○大阪府→ 学校長がグランドデザインを持つことはとても大切だと感じている。キーパーソンチームをつくり、方向性を示すことも重要。これらに加え、教員が組織として合意形成を図りながら、同僚性・協働性を発揮していくことが必須。そのために、教員が本来行っていきたい子どもの笑顔が生まれるような取組や、教員の負担感が少なくなるようなしくみをつくるのが大切である。

○兵庫県→ 実践を通じた好事例及び失敗事例を校長等に示すことにより選択の幅を広げる機会をもつことが大切。

○滋賀県→ これまでの現場経験の中でキーパーソンチームの力によって事案が好転したケースがある。学校現場では、多忙な教員に働き方改革が求められる中、教育委員会としては、既存の強みを認めながら、その学校に必要なことを適切に助言していく必要性を感じた。

○和歌山県→ 日常の中で顔が見える関係をつくることは重要である。その際、学校長に情報が集まる工夫として支援ノートの共有や、専門職の意見をどう伝えて判断していくか等が大切であると考えている。

片山先生より

- ・ SC、SSWの勤務形態を常勤化したり、在籍人数を増やしたりすることも視野に入れていく必要がある。
- ・ 米国では3人の副校長のうち1名が生徒指導部門を統括しており、他の教員

は授業に集中して取り組むという実態をみて、日本でも早い段階で先生方が子どもと過ごせる時間を確保するべきと感じた。

- ・ 教員不足解消の問題も含めて学会で研究していくことは、大切な役割だと考える。

桶谷先生まとめ

○生徒指導の原点

生徒指導の機能は、単に問題行動を防止するだけでなく、子供一人一人を中心に子どもたちの心をつないでいくものだという生徒指導の原点を改めて考えることができた。

○学校のプラットフォーム化

教育社会学の視点からの提案があったように、人間が生活していく中での排除と包摂、とりわけ包摂という観点に着目したときに、生徒指導の役割が非常に大きいものであると感じた。

○生徒指導の3段階

課題解決的生徒指導、予防的生徒指導、開発的生徒指導をふまえ、今後子どもたちにどのような力をつけていくべきか、また、我々大人がどのようにサポートしていくべきかを本学会でも考えていく必要があると感じた。

- ・ 令和4年度日本生徒指導学会研究大会が、令和4年11月5日・6日、池坊短期大学を会場に関西地区研究会と合同で開催されます。ぜひ、皆様もご参加下さい。

この NEWS LETTER は、令和3年度日本生徒指導学会関西地区研究会「元気の出るセミナー」、「関西発！元気の出る生徒指導～コロナ禍においてどの子もとり残さない生徒指導をめざして～」(Webex を使用)を要約したものです。